

# 第5期科学技術基本計画を踏まえた 日本科学未来館事業の方向性

2016.03.30

# 1. 日本科学未来館の理念・活動の特徴

## ■ 日本科学未来館 設立の理念

「国民一人一人が人間社会と科学技術の在り方を探り、文化の形成に果たす科学技術の役割と未来を示唆し合い、語り合い、理解し合う場」  
(「科学技術理解増進推進拠点(仮称) 総合監修委員会報告書(平成12年12月1日)抜粋)

## ■ 日本科学未来館の科学コミュニケーション活動

来館者が現役の研究者等と語りあう場を設定し、来館者の疑問や不安・期待等を研究者に直接ぶつける機会を設けることにより、一般の方の先端科学技術への理解や共感が深まり、気づきや発見につながるとともに、科学技術や研究開発の在り方について考えるきっかけとなる活動を実施。また、ニュース性の高いタイムリーな話題を取り上げ、科学コミュニケーターがファシリテーターとして介在することで、双方向のコミュニケーションを円滑になるよう演出。

### ● 社会的に関心の高いテーマや、人々の意識を喚起する科学コミュニケーション活動

第一線で活躍する研究者と来館者が対話するイベントの他、時宜を捉えたイベント(ノーベル賞や東日本大震災関連等)を実施。社会のニーズに応えるとともに、社会における科学技術の在り方についてともに考える活動を行う。

#### 「サイエンティスト・トーク」

研究者の話を直接聞くことで、未来社会と自分の関わりを考える機会を提供するとともに、双方向のコミュニケーションの場を提供。

#### イベントタイトル・講師(一部抜粋)

- 「細胞、からだ、私。—医療を選ぶ日までに聞いておきたい『細胞』のはなし」  
講師：浅島誠(独立行政法人日本学術振興会理事、東京大学名誉教授)
- 「あなたと自然をつなぐ分類学～分類から解き明かす地球の自然史～」  
講師：馬渡駿介(北海道大学 名誉教授)
- 「“アルクダケ”でその人がわかる!? ～歩容認証がみちびく未来の暮らし～」  
講師：八木 康史(大阪大学 理事・副学長)

#### 「どうなる? どうなった? 2015年のノーベル賞」

発表前からWebでの情報発信とともに、ノーベルスタジオを展示フロアに設置。発表後は即時に受賞内容の発信を行い、翌日から解説実演を実施。ノーベル賞について知ることができる場所として、多くの来館者やメディアの取材を受けた。



### ● 研究者の意識を改革する科学コミュニケーション研修プログラム「サイエンティスト・クエスト」

事前研修を受けた研究者が展示フロアを活用し、1日数回、来館者と直接対話を行うことで、自身の研究について社会の側から多角的に捉え直す機会を得る実践的なプログラムを実施。

### ● ニコニコ生放送等、オンラインを活用した非来館者への科学コミュニケーション活動

ニコ生やYouTube等のオンラインメディアを駆使し、時宜を捉えた情報発信を積極的に行うことにより、展示フロアでの対話や イベントの規模を大きく越えた科学コミュニケーション活動を実施。

#### ■ niconico×日本科学未来館 【徹底解説】MERSアタックから身を守る

6月に韓国で感染者が急増したMERS(中東呼吸器症候群)は不安や知識不足からくる「誤った内容」がネット上に行き交った。感染症流行時に起こりかねないパニックや差別の助長を抑えるために、国立国際医療研究センター 国際感染症対策室の先生を招き、公式発表から読み解ける正確な情報と現状を発信した。



## 2. 科学コミュニケーターの育成と輩出

### ■ 科学コミュニケーターの育成・輩出状況

館内外での「科学を伝える」活動の実践をふまえた、独自の人材養成システムにより、科学コミュニケーターを育成し、輩出している。

- 最先端の科学技術について、来館者との対話を通じて共に考える活動を実施。
- 館内に留まらず、最先端科学技術の動向を広く国民に発信し、研究の面白さを伝えるとともに、国民の疑問や期待を研究者に伝えることで、科学と社会の間に双方向のコミュニケーションを創出。
- 科学コミュニケーターの輩出数：75名（平成21～26年度）  
（全国の科学館や大学・研究機関などで、社会と先端科学技術をつなぐ活動を展開）

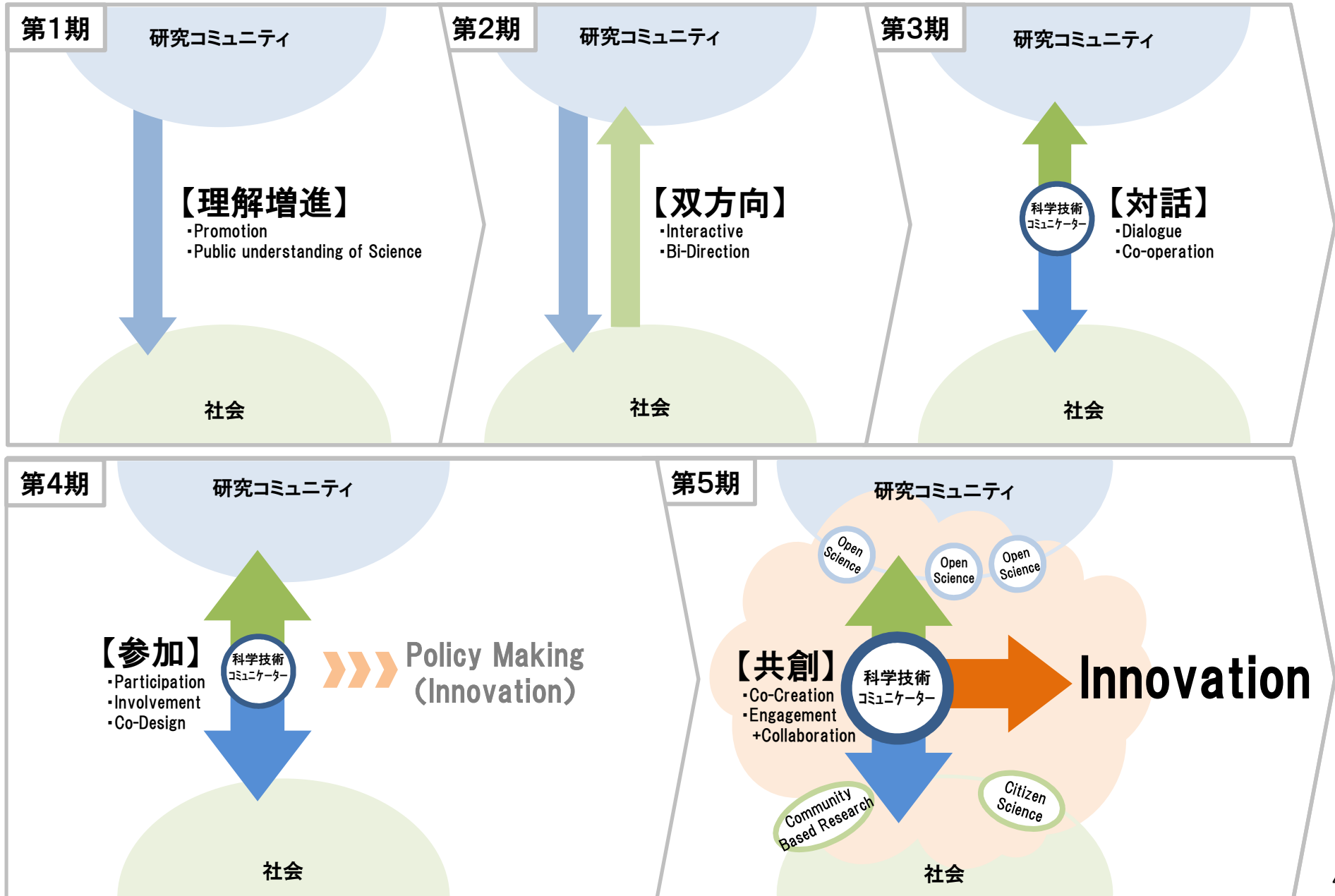


### ■ 求められる科学コミュニケーター像

社会と先端科学技術の橋渡しをするとともに、課題・問題の本質を捉えたうえで社会・一般の声を研究コミュニティの届け、研究者と対等に議論し、科学技術イノベーションを推進できる、国民から信頼される科学コミュニケーション人材。

（双方向コミュニケーションから対話・協働による「共創」へ）

### 3. 科学技術基本計画における、科学技術と社会の関係に関する記述の推移



## 4. 未来館事業の強化 (対話・共創／研究者の意識改革)



### 科学コミュニケーションを牽引・展開する事業へ

未来館は研究開発と社会の関わりや研究の本質が見える場であると同時に、多様なステークホルダーが対話し、人類が持続的に発展できる豊かな社会の構築を目指した活動を推進することが引き続き重要である。第5期科学技術基本計画に沿った活動を展開するにあたり、課題抽出型科学コミュニケーション活動を強化するとともに、科学コミュニケーターの役割を見直し、全国へ活動を広げることにより、日本における科学コミュニケーション活動を牽引していく。

#### ① 課題抽出型科学コミュニケーション活動の強化

共創型科学技術イノベーションの推進に向けて、課題抽出型科学コミュニケーション活動を強化すると同時に従来の科学コミュニケーターの位置づけ・役割を見直し、共創に向けた対話の担い手として活動する。

- 1) 多様なステークホルダーによる対話・協働・共創を推進し、社会・一般の声を共創的 science 技術イノベーションにつなげる  
科学コミュニケーターへ
- 2) 研究者に社会と向き合う姿勢、及び科学コミュニケーション能力を伝承する科学コミュニケーターへ

また、新たな共創に向けた科学コミュニケーション活動を牽引する専門人材を確保。対話・共創の場の企画・設計とそのアウトプットに向けた計画立案や非専門家の声の分析を行う。

#### ② イノベーション推進に向けた「共創」活動の推進と研究開発支援

1. 一般の方を含む非専門家の声を収集し、研究開発現場にフィードバックする機能を充実させる。
2. 研究者と一般の方を含む非専門家が双方向で対話を重ねる場を創出し、知識創造や政策形成へと結びつける「共創」を設計し推進する。
3. 研究開発の本質を展示やイベント等を通して見せる活動により、社会側の研究開発への理解と協力を得る。

#### ③ 科学コミュニケーション活動の全国展開

全国のURAや研究者に科学コミュニケーション能力を伝承し、科学コミュニケーションの担い手の多様化を図るとともに、大学や研究機関とも連携し活動を展開する。

#### ④ 研究者の社会に向き合う姿勢の涵養に向けた取組の実施

研究者の社会に向き合う姿勢の涵養・意識改革に向けた、未来館の場を活用した研修やプログラム等を実施。

<参考>

# 学協会との連携による対話活動(案)

